

2017A セメスター一金曜 4 限 日本文化論 I

翁論—日本演劇の発生と天皇制の変容

松岡心平教授

2017A セメスター 日本文化論 I 『翁論—日本演劇の発生と天皇制の変容』

金曜 4 限/21KOMCEE East K113

松岡心平教授[教養学部教養学科超域文化科学専攻学際日本文化論コース]

【ステートメント】

14C に世阿弥が大成した「能」という仮面劇の源流は、鎌倉時代に生まれた〈翁〉という儀礼芸能にさかのぼる。この講義では、まずは〈翁〉という儀礼がどのようにして発生し、それがまた「能」という仮面劇にどのように展開していったのか、を考えてみたい。

〈翁〉の発生のプロセスで重要なのは、〈後戸（うしろど）〉という空間ないし観念である。〈後戸〉は、仏堂中央に鎮座する本尊の背後あるいは裏側の空間である。〈後戸〉は、貴と賤、聖と俗、現世と冥界の接点・境界であって、力の発生の場所であり、見方を変えれば、国家の拠り所としての仏教と、大地神のような土着の神々が結びあい習合していく、結節点ともいえる空間であった。

この〈後戸〉を母胎として〈翁〉が発生してくるという事象は、平安末から鎌倉時代にかけて、広げに日本の古層の神々、大地神的なものが復活してくる、その一環であった。

天皇という存在もまた、『古事記』『日本書紀』に描かれるような国家的な神道世界だけに頼るのではなく、それらを支える古層の神々とも秘かな契約を結ぶことで新たな力を得て、復活をはかろうとするのである。天皇制の変容といえる事態である。

ともあれ、能という芸能、とりわけその発生の局面を注視することで、日本の政治・文化・宗教史の読み換えをはかってみてみたいと思う。

話題一覧

能の話

〈翁〉

猿楽や朝廷の歴史概観

修正会

悔過会から修正会へ

修正会・修二会の構造

修正会カーニバル化への志向

追儺

後戸

風姿花伝に記された後戸の起源

新猿楽記

非人身分の人々

荒神、古層の神、境界の神

天皇制の変容

翁芸の成立

検非違使/後戸奉行

能の話

能は主として超越的世界と交流する仮面劇であり、合唱隊(地謡)・オケ(四拍子)付きの歌舞劇。

狂言は主として生きている人間を扱うコメディ、せりふ劇。

この二種類があることで、精神的バランスが取れる劇場になる。日本語の全景も見える。

〈翁〉は「能にあつて能にあらず」と言われ、物語のない古態の祝芸である。

雅楽の龍笛から進化した能管(能の笛)は縄文時代の石笛に近い、シャーマニスティックでノイジーな音色を持つ。「のど」という特殊な構造があり、それによってヒシギという甲高い音を出すことができる。これはフルート系の楽器の中でも世界最強。ヒシギは亡霊の登場時などに印象的に鳴らされ、超越的世界を舞台に実現する。

能楽の音楽は基本的にノイズ的であり、それまで日本を支配していた大陸系の雅楽への及逆とも言える。真に日本人の心に即しているのはノイズ的な音だと発掘したとも。

ノイズ的なオーケストラ。

能舞台の「橋掛り」は、「鏡の間」と「舞台」をつなぐ。

鏡の間は楽屋であると同時に、神聖な闇のトポスである(あの世も含意)。舞台という光のトポスと二元的関係をなしているとみなせる。もう一つの舞台でもあり、〈翁〉上演の際には翁飾りを施し、出演者は酒を酌み交わしたり粗塩をかけたりという儀式を行う。

cf. 歌舞伎や西洋劇の「花道」は橋掛りを正面に出して派手な演出効果を出せるようにしたもの。そこに闇という要素はなく、一元的に光のみの世界。

〈翁〉

正月によく上演されるめでたい祝言芸で「能にあつて能にあらず」と称される。

見かけとして能と違うのは、ストーリーがなくただひたすらめでたい文句と舞が続く点、通常 1 人の小鼓方が 3 人登場する点、面の付け外しが観客の眼前で行われる点など。

仮面の付け外しに関しては、異界との仮面を通じた交流・能の本質的プロセスが公開される芸とも言える。

翁大夫が客席正面に向かって深く一礼(観客に向かってとも、観客の向こう側の神に向かってとも) 役者、囃子方みな位置につく

「とうとうたたりたたりら〜」の謡(意味はよくわからない)

能役者による千歳せんざいの舞 その間に翁大夫は面箱から面を取り出してつける(人から神になる)

翁大夫による翁舞

面を外す(人間に戻る)

その後…

(父ノ尉面をつけた能役者による芸…世阿弥の頃には既に省略されているパート)

狂言役者による三番叟もみのだん揉ノ段

狂言役者が黒式尉面をつける

狂言役者による三番叟鈴ノ段

※資料『小学館日本古典全集』の翁台本や解説を参照のこと

猿楽や朝廷の歴史概観

東アジアでの演劇の成立は比較的遅い。三島由紀夫や馬場あき子は、その成立の様子をダムに例える。すなわち、縄文文化から貴族文化までの日本文化が能楽というプールに注ぎ込み、中世に発電が始まった。修正会・修二会のような宗教儀礼の中から生まれてきたもので、その経路はギリシア悲劇(能と同じく合唱隊付きの仮面劇)がデュオニソス祭祀から立ち上がってくる経路に類似していると言えるが、研究は進んでいない。

8世紀

滑稽な寸劇

中央集権的な律令国家時代(天皇は諸官を率いる) 朝廷

シルクロード由来の散楽が、中国の唐散楽(百戯)を經由して日本へ伝来。

平安中期に日本で成立した田楽と絡み合っゆく。

散楽：正楽(雅楽)に対する語。曲伎(アクロバット)、幻術(マジック)、滑稽戯(お笑い、寸劇やコント)からなる多様な雑芸。日本において曲伎と幻術は天狗思想と結びついてしまったため仏教的な世界観が中心となる中で嫌われ廃れてゆき、滑稽戯が主流になる。

田楽：楽や舞踊からなる。田植え前の田遊びから発展したといわれる。

10世紀

日本的王権国家(天皇は宗教的権威) 夜廷？

散楽で滑稽戯が中心化していくのと同時に音が転化し、猿楽と呼ばれるようになる。

cf. 古語「さるごうごと」「さるごうがまし」←「猿楽ごと」

宿神・荒神の出現。

藤原道長の頃から、悔過会が修正会・修二会に変貌。

11世紀

寺院に後戸という空間が成立

後戸猿楽として呪師や追儺の鬼となる

『新猿楽記』藤原明衡…民間レベルでの下衆猿楽見物の流行の様子

13~14 世紀 鎌倉時代末期

翁面の形成、仮面パフォーマンス〈翁〉の成立

『春日臨時祭記』（1283/弘安6年）の頃には形式化。

ベルリン博物館所蔵の翁面には弘安元年の銘がある。

14 世紀

仮面による能の成立

『後愚昧記』三条公忠…永和4年の日記に“(猿楽ハ)乞食ノ所業”との記述

15 世紀

複式夢幻能の成立

『風姿花伝』『花鏡』世阿弥…乞食の“猿楽”ではなく“申楽”とアイデンティファイ、「花」の理論化を試みた、世界演劇界に先駆けた本格的演劇書。

修正会

通常、正月8日から14日にかけて、7日間行われる。白河院建立の法勝寺が基準となって、六勝寺全部で日をずらしたり日数を短くしたりして行う。貴族はその全部に顔を出す義務を負わされた。

翁芸の発生に関わると考えられるものは以下の通り。

東大寺二月堂修二会(お水取り)、薬師寺修二会(花会式)

通常の修正会・修二会が7日間であるのに対してお水取りは14日間ある、前半は大観音、後半は小観音に対する法会ということか(両方とも十一面観音)。普段は大観音の裏正面に置かれている小観音を出御する。→「後戸の神」との類似

観音悔過に陰陽道的民俗が加わり、罪を懺悔すると同時に、そこに集約された罪を穢れとして払ってしまい、新年リニューアルという穢れ払いの性格。→翁は穢れ払いに関わる

興福寺修二会

この修二会から生まれた薪猿楽(→薪能)において、春日大社への奉納〈翁〉が「呪師走り」と呼ばれている。→翁は呪師芸から生まれた

法勝寺、法成寺、蓮華王院などをはじめとする全国の寺社の修正会

民間猿楽の参加が見られ、法呪師の機能を代行する呪師猿楽が活躍。

呪師猿楽のみならず下衆猿楽も追儼の鬼の役として参入し、彼らが後戸猿楽と呼ばれる。

毘那夜迦(荒神)との関係

天台宗の常行堂修正会

担い手は僧侶たちで、民間猿楽の形跡はない。

後戸の神として摩多羅神(荒神)が登場し、芸能や性を肯定する本覚思想のもと、〈翁〉発生の一因となるか。

悔過会から修正会へ

六時型から二時型へ

悔過会は初夜、半夜、後夜、晨朝、日中、日没の六時にわたって営まれたが、修正会では初夜(午後七時頃)、後夜(午後十一時ごろ)の二時型に変化。仏教法要全般が一般的に朝から昼にかけて行われるものなのだが、夜型になったことは修正会の火の祭典としての演出効果をあげることにもなる。この二時の間のゴールデンタイムに呪師猿楽による法呪師をデフォルメした呪師芸と下衆猿楽によるエンタメ雑芸が催される。呪師猿楽と下衆猿楽の間に身分差はあるが、ここではペアというカセットで芸を行う。

『小右記』(987)：円融寺修正会の記録。「音楽、呪師、啄木舞」

『左経記』(1025)：法成寺修正会の記録。「呪師、次骨無」

猿楽が修正会・修二会に追儺の儀式で追い出される側の鬼の役として招き入れられた理由としては、猿楽が呪術的要素を含みつつ面白い芸人としてカーニバルをする才能を持ち合わせたからと考えられる。

平安朝中期以降、天皇は清浄でなければならないという意識が強烈になり、天皇は自由な外出も卑賤な身分の者を内裏へ入れることも猿楽を見ることも、穢れを纏う原因になるとして許されなかった。一方で治天の君とも呼ばれた院は、天皇ほど穢れを気にする必要がなかった。院が天皇家を代表して一年の穢れを払う儀式が修正会・修二会である。

修正会・修二会の構造

表/光

顕教的部分。言葉によって法会をリード。

対象は本尊。担い手は大導師、導師。

国家安寧、豊作祈願などを祈願。

裏/闇

密教的部分。結界鎮壇の呪術。

対象は後戸の荒神。担い手は法呪師、呪師猿楽、侍猿楽、下衆猿楽。

表向きの会が無事に遂行できるよう、裏から支えている。→風姿花伝のインド(後戸)起源説

法呪師：僧侶。本儀礼では鎮壇の呪術を担い、追儼では鬼を追う側に立つ。

呪師猿楽：実体不明(稚児などか)。本儀礼では芸能化した鎮壇の呪術(呪師芸/呪師手)を行い、追儼では龍天・毘沙門天を仮面付きで演じる。『公教卿記』(1141)に、呪師猿楽が龍天・毘沙門天を演じたことが記録されている。(呪師猿楽は名前も記しているが、下衆猿楽の名前がないことは身分差を感じさせる)

下衆猿楽：非人身分の芸能者。本儀礼では拵躍(手を打って踊ることや木製具による打敷き)、歓呼(叫喚)、乱声(法螺貝や金剛鈴を振り鳴らすこと)を担う。追儼では鬼・毘那夜迦を仮面付きで演じる。

侍猿楽：近衛官人(六位の蔵人など)。役割としては下衆猿楽と似る。起源は不明。ある侍猿楽が天皇の眼前で、半裸で狂い踊る芸を披露したという記録がある。cf. シェイクスピアの戯曲『リア王』に登場する「道化」

修正会・修二会 カーニバル化への志向

- ・後戸から法螺貝と金剛鈴による乱声(不気味な音)
- ・木製具で来迎壁を裏側から叩く音
- ・追儺で燃え盛る炎
- ・観衆による、本尊(本堂)に向かったの飛礫

暴力性を以って今後一年間をこなすパワーにする。ヒステリア状態。マス・ヒステリアの起こる力の空間。それを天皇家自らの力として変えること。背景にある、後戸の神、またさらに古層の地霊の神によるバックアップ。

後戸猿楽は院や貴族の臨席のもとパフォーマンス。狂の空間の創出・阿鼻叫喚の場にするのが彼らの仕事であり義務。『明月記』には、猿楽師の面長^{めんちやう}が、修正会で叫喚しなかったことで後鳥羽院に目をつけられてとんでもない職務怠慢として検非違使に引っ捕らえられた話が記されている。

修正会・修二会そのものが、そもそも仏教行事の枠組みから外れたものである。元々は天平年間から悔過会という正式な仏教儀式が行われていた。これはただ旧年中の罪を告白し滅罪を願うだけのもの。これに民衆性が加わりながらリニューアルした修正会という形は、藤原道長が創始。はじめ無量寿院、続いて建立したばかりの法成寺で正月八日から七日間の修正会が行われた。『小右記』には歌舞音曲や呪師やその盛況の様子が記されている。道長に謁見する貴重な機会でもあって定例化し、いつのまにか朝儀として年中行事に組み入れられた。日本古層の神が中世においてせり上がり、国家体制に組み込まれる。道長や紫式部の時代から既に中世的といえて、白河院政へ連続するイメージ。次第に民間の寺院でも執り行われるようになる。

明治政府は「神国日本」を立ち上げるために中世に神道にまわりついた仏などの思想をひっぺがして純粋日本を探求した。神仏習合・本地垂迹のあり方こそ日本的ではないかと再考すること。

ex. 奈良県指定無形民族文化財 ^{だだどう} 陀々堂の鬼走り

修正会。父鬼、母鬼、鈴鬼(子鬼)が現れて穢れを払う。鬼たちを追うものは登場しないので追儼とは言えないがその変形。1490年頃に作られたとされる大きな鬼の面をつけた男3人が、松明を持って堂内を3周する。誰が持った火がよく燃えたかで、豊作の占いをする(父→早稲、母→中稲、子→晩稲)。勝手という役は、松明で宙に「水」という字を三度書く(水天×火天のイメージ)。

来迎壁を二本の棒で叩くのは「阿弥陀様の肩叩き」と呼ばれている。後戸から騒音を響かせることが重要。騒音は悪霊退散に直結。 cf. 魔女狩り

一連の儀式の後には餅撒きがある。これも騒乱状態を現出することになる。

鬼役の男たちは1月8~14日の潔斎期間、鬼という崇高なるもの、上がいない最強のものとして全部自分でやる生活をおくる。

ex. SPAC 宮城聡による『アンチゴネー』（原作: ソフォクレス)の上演

「没したる者、みな、仏！」祝祭としての演劇。ローマ法王庁の石壁の前にて上演が行われた。穢れ払いと鎮魂の物語に、日本人の死生観を重ね合わせた。フィナーレの盆踊りの中で成仏する。水と岩というモチーフによって、折口信夫の小説『死者の書』の世界を無意識に演出？

また、アンチゴネーの前のエピソードである「オイディプス王」では、オイディプスという名自体が「くるぶしに障害」というような意味を含む。この作品で西洋的なのは、王が自分自身で目を潰すところ。神の力ではなくで人間の自由意志にかけている。

cf. ギリシアのディオニュソス祭祀からギリシア悲劇が立ち上がってきたこと。ギリシア劇は合唱隊つきの仮面劇である。悲劇の「みんな死ぬ」は穢れ払いとも言える。

追儼

鬼やらいとも。修正会・修二会の最終日に、穢れや邪気を全て鬼(毘那夜迦)に形象化し、追却することで穢れ払いが完成する。

追われる鬼(毘那夜迦)を下衆猿樂が、追う鬼(龍天・毘沙門天)を呪師猿樂が、それぞれ面をつけて演じる。演劇的要素の強い儀式(シーン)で、中世の劇場国家的性格の表出とも捉えられる。

追う鬼を呪師猿樂とする点は記事があるので確実。追われる鬼を下衆猿樂とする説は、呪師猿樂と下衆猿樂が初夜と後夜の間交互にそれぞれの芸を披露するという記述、そのペアが最終日の追儼まで継続すると考えるのが自然であるという筋道から。

『中道呪師作法』にその具体的方法が伝えられている。

後戸

奈良時代の寺院はフラットな作りで、本尊の裏側に特別な空間などはなかった。それが平安時代に特異な境界空間であると見なされるようになる。すなわち、本尊及び堂全体をバックアップする、異界の非常に強力な靈威が噴出して来る場所。そのパワーが摩多羅神や執金剛神といった荒神の姿に見なされるようになる。荒神のパワーは、天皇家の王権を最も深いところから守護する。

はじめのうちは「仏後」が空間を、「後戸」が空間の扉そのものを指していたが、次第に空間も含めて「後戸」という呼び方に統一される。

後戸から泉が湧き出てくる、後戸で仏舍利を発見する、などといった伝説も、後戸の靈力によったもの。

明恵上人は『夢之記』(1211)に「後戸」で太った女性と交わる夢を見たという記述を残した。不健全としてそういった夢を見たことを隠すのではなく、仏のお告げにかなっていると弁明しつつも敢えて書き記したこと。

修正会・修二会では、呪師や猿樂たち裏側の担い手が詰める場所であった。楽屋であると同時に、ここで「乱声」や「扑躍、狂言、歓呼」(『釈氏往来』)の大騒ぎを発生させる。

『風姿花伝』に記された猿楽の起源

風姿花伝第四 じんぎにいほく 神儀云 は猿楽(申楽)の起源諸説について記されている。

1 日本の神楽起源説

天照大神の岩戸籠りの際、神々たちが天照を誘い出すために篝火をたいてその周りで大声をあげながら足踏みし、舞い歌うという大騒ぎをしたことが起源である。

2 インド起源と見せかけた後戸起源説

インドで祇園精舎建立の際、釈迦如来が説法をしている間に釈迦の従兄弟でライバル心を抱いていた提婆達多が大勢の異教徒を連れてきて、堂で踊り狂って邪魔をしたので、舍利仏・阿難・富楼那が主導して後戸で音楽や六十六番の物真似芸を開催して異教徒達の気を引いた。異教徒達はこれを見に集まってきて静かになり、その隙に釈迦如来は説法を無事に済ました。

※修正会・修二会の二重構造がインドの話として写し取られている。すなわち、釈迦如来≡導師、舍利仏≡後戸猿楽、異教徒(外道)≡後戸の荒神/穢れ。世阿弥は、後戸猿楽が自分たちの起源であることを自覚していたか。

3 秦河勝祖先説

初瀬川に流れてきた壺の中の赤ん坊が天皇に取り立てられて出世を重ねた。秦の姓を賜り、名を河勝といった。天下の都合が悪い時、聖徳太子が 1,2 説の例に倣って六十六番の物真似と六十六の面を秦河勝に教えてやらせたところ、天下に平穩が訪れた。聖徳太子は神楽の「神」のへんをとった形、また「楽しみを申す」という意味で、「申楽」と名付けて後世に残した。秦河勝は最終的にはうつほ舟に乗って荒神になってしまう。その秦河勝が観世座の先祖であるという話。

※低身分の集団が、自らの祖先を天皇家と関連づけようとする話はよく見られる。

新猿楽記

稲荷の祭りに猿楽見物へ行く設定で、民間における下衆猿楽の実態をよく描写している。

「呪師」の記述により、仏教法会で活躍する法呪師、を芸能化した呪師猿楽が民間の下衆猿楽に流出していることがわかる。

「呪師～骨有」は芸のジャンルであり、「延動大領が腰支～事取大徳が形勢」はすべて物真似や寸劇の類。コント。スラップスティック。

ひきうとまい 侏儒舞：小人芸。 かいらいし 傀儡子：人形遣い。 くぐつ 傀儡という芸人集団に担われていた伝統芸。

唐術：中国風の奇術。 しなだま りゅうご やつだま 品玉・輪鼓・八玉：ジャグリング

ひとりすまい 独相撲：ひとり相撲。 cf.愛媛県の大三島にある大山祇神社の例祭(春の御田植祭と秋の抜穂祭)では、稲の精霊と一力山による一人角力が奉納される。ここでは稲の精霊が勝つことで春には豊作が約束され、秋には収穫を感謝する。

骨無：身体の関節を外す芸。 はらわた 腸 を断つ・ おとが い 頤 を解く：笑う。

千秋万歳が酒禱：漫才の原型。祝芸。

福広聖が袈裟求め：博打で丸裸にされた僧侶が衣服を求めて歩き回っている真似。

「県井戸の先生・坂上菊正・還橋徳高」は芸名。県井戸(水との接点)、坂上(神社仏閣との接点)、還橋(向岸/あの世との接点 cf.安倍晴明が一条戻橋で父を蘇生させた伝説)は境界空間であり、それを名に冠していることから、猿楽芸人は境界空間に集住し、神道の八百万神とは別の、より卑賤な次元で存在する境界の神を信仰していた者たちのようである。

非人身分の人々

自ら穢れている立場にありながら、穢れと直接関わり、その穢れを祓う。彼らは清目きよめとも呼ばれ、河原者や芸能者などが含まれる。彼らは河原などに集住し、境界空間を押さえる立ち位置にもあった(水は典型的な異界とのチャンネル)。穢れる彼ら非人の存在のおかげで、人たちの世界は安寧を保てるという感覚。神道の粹組みからは外れた宿神を信仰する。→荒神であること。後戸の神との類似。猿楽が修正会・修二会に招き入れられた理由としては、猿楽がそのような呪術的要素を含みつつ芸人としてカーニバルをする才能を持ち合わせたからと考えられる。猿楽芸能者の主な仕事はあくまで滑稽戯こっけいぎであり、修正会・修二会以外の時期は特に呪術的空間に身を浸していたわけではない。

中世には上流階級が中下級の文化を摂取する現象が起こる。本当の極貧者が大量発生すると大々的な救済措置が取られる。大きな格差がない(はっきりした奴隷がない)とも言える。そもそも中央が弱小・中間層が豊かな時代。足利氏直属の側近武士は100人ぐらいと言われている。そしてイメージ戦略、文化面に肩入れする政治へ。義満は世阿弥を見出したことで、「演劇」という新たなメディアを手に入れた。世阿弥作の『井筒』は平安貴族の物語だが、それを武家が演劇として掌握しているという強みを握る。

後戸の神/荒神/古層の神

仏典に根拠はなく、日本神道(八百万神)の枠組みからも外れている。中世の神仏習合という特殊な風俗の中で発展。神仏以前・縄文の古層の神が、中世に再び姿を現したとも言える。みな強力な靈威をもち、それは自然の恐ろしい猛威であってかつ天皇家と国家を深層から支えるものでもあるという両義性をもつ。猿楽に直接関係するものとしては、摩多羅神、毘奈夜迦(聖天/双身歡喜天)など。

摩多羅神

13世紀頃に登場した性と芸能の神であり、「無明」「三毒(しばしばへびに形象される)」を本体とする。延暦寺、多武峰(奈良)、毛越寺(平泉)、輪王寺(日光)など天台宗系の常行堂(常行三昧堂)の後戸の神。東シナ海のあたりで現れたと言われている。小観音とも近い。天台宗の一派・玄旨歸命壇げんしきみょうだんは摩多羅神を本尊とした。寺院によって、後戸に祀られている場合(延暦寺西塔、毛越寺)、修正会の時だけ後戸に來臨する場合(日光輪王寺、多武峰)の両方がある。後者は摩多羅神の影向的性格を表す。常行堂の本尊は阿弥陀仏であるが、その周りを何日も念仏を唱えてぐるぐると巡り続ける常行三昧という厳しい行法の際、僧侶たちは阿弥陀仏の後ろに回った途端跳ね躍りながら経を唱え、摩多羅神を慰撫して加護を祈る。並ならぬ修行であるため、幻覚や幻聴の予防として。狂を以って狂に對抗すること。摩多羅神は芸能の「狂」のパフォーマンスを司る。

多武峰：摩多羅神の前で行われる猿楽芸の一つとして、現在の能楽の〈翁〉に近似した翁芸が出現する。しかも、摩多羅神面とされる翁面が伝わっている。(※授業の最初で、その面を用いた観世清和による奉納〈翁〉を鑑賞したが、最終的に触れきれなかった翁の発生についても、ここに帰って来たのだとシケ対は思っている)

玄旨歸命壇：天台宗の一派で摩多羅神を本尊とするカルト集団。「煩惱即菩提」「無明即法相」などといった反対物一致の一元論と、それゆえの性や芸能など煩惱や無明の側の事態も一挙にまとめたこの世の絶対肯定を特徴とする。江戸時代に邪教として排除された。

小観音：東大寺二月堂の本尊の一つ。大観音と対で、大観音の背後に祀られている十一面観音。二月堂修二会(お水取り)の後半には、後戸から大観音の前に出御される。

毘奈夜迦

追難で追われる鬼。聖天、歡喜天とも。しばしば像が2頭抱き合った形の双身歡喜天としても表象される。鼻長大臣のあだ名をもつ意蘇賀大臣が皇后と不倫の仲になり、天皇がこれを罰するため毒である象肉を食わせたが、皇后はこのことを大臣に伝え、雞羅山で油を浴びて大根を食えば生き延びると言った。大臣はその通りにして命をとりとめた上で、大荒神となって王宮に押し入り害を成した。皇后は荒神となった大臣と交わることでこれを鎮め、二人して歡喜の状態で抱き合う夫婦象になった、という伝説。この伝説は荒神の両義性(大障礙神/大慈悲神)をクリアに説明する。

執金剛神：東大寺法華堂(三月堂)の本堂裏に祀られる。

ミシャグジ神：日本土着の原始信仰。水稻農耕が始まった頃に出現したと考えられている。

古いものは石棒で形象され、小さな祠に祀られる。石神、宿神は音の変化した形か。

記紀神話の広まりとともに各地に立派な神社社殿が建てられるようになると、境内の隅に摂社として残るのみになってしまったが、日本の神話以前の最古層の神といえる。

胞衣荒神：ミシャグジが男性器で表されるのに対して胞衣神は胞衣、すなわち女性の体内で胎児を包む膜のことである。cf. ケルト(アイルランド)にも同様の信仰が存在

諏訪神社(長野)のミシャグジ祭祀：諏訪ではミシャグジは空間的な境界ではなく、地域の中心に祀られている。祭祀の実態は不明。当地方においてミシャグジは記紀神話の建御名方命と同一視されるようになる。

銀鏡神社(宮崎)の銀鏡神楽：イノシシの頭が奉納される。

春日若宮(奈良)の御祭：キジ・サケ・タヌキなど動物の死体が大量に奉納される。若宮も荒神の一種と捉えられる。

天皇制の変容

平安時代以降、天皇は穢れ、あるいは自然力(猛威/荒々しく禍々しいエネルギー)を極端に忌み嫌うようになる。古代では、禊の儀は存在したものの血や死の穢れは中世ほど強く意識されてはいなかったといわれている。しかし、そのような自然力は、穢れそのものの側にあると同時に穢れを追い払う強力なパワーにもなり、表裏一体。天皇自身が穢れに触れることは(原則的には)絶対にないわけだが、穢れ避けるためにむしろ穢れを媒介して非人身分の人々と関係し、穢れに最も近い場所にいたと言える。芸能好きの称光天皇が下衆猿楽を内裏に集めたことは大問題となった。宮中に穢れが持ち込まれた瞬間、政治機能が全て停止してしまうような時代である。

天皇が穢れに対して神経質になってゆくのと同時期に、院がその穢れを引き受け、天皇家全体にエネルギーを吹き込み直す役割を持つようになる。大きなところでは、修正会が開催されるようになる。修正会は院政の終焉とともに廃れてゆく。

日本の王政は、そもそも自然力と密接な関係にあるものであった。奈良朝において中国の律令制を取り入れたが、日本に合わないことが明らかとなり、格式(ex.延喜式/醍醐朝)の制定や令外官の設置(ex.蔵人頭/嵯峨朝)などを通じて、天皇と直結する新たな日本風組織が構築された。万葉集世界から古今和歌集世界への移行も同じ。平安朝の中で天皇の穢れに対するアレルギー的なものが強くなるのと並行して院政が成立し、天皇ほどに穢れを気にする必要のない院によって修正会が催されるようになり、その後戸に猿楽が入り込んだことで、天皇家全体としては自然力と結びつくチャンネルを手に入れたことになった。

修正会の追儺は法会の結願日である最終日(7日目)に執り行われる'一大カーニバル'であるにもかかわらず、前天皇の喪中であらゆる歌舞音曲が禁止される年でさえ行われる行事であった。天皇家が昨年におったケガレをまとめて鬼に表象しそれを追い払ってしまうことで、天皇家は潔白の状態

で新しい年をはじめることができる。修正会の全てのエネルギーは追儼で鬼に継承されて追い払われると同時に、牛王宝印ごおうほういんに集約されて院の額に押されることで法会が終了する。

牛王宝印：牛の胆嚢にできる結石であり霊薬として用いられる「牛黄ごおう」を印色として寺社の朱印に用いたことが起源とされている。

法勝寺の修正会は1月8日~14日に執り行われるが、裏番組として天皇自身は後七日御修法といって真言の密教僧を大内裏に集めて加持祈祷した水を天皇の頭にかける「灌頂かんじょう」という儀式に参加している。

院政時代は劇場国家であり、芸能国家。白河院の起こした大田楽騒動などはデュオニソス的と言える(院の娘が亡くなったのはそのためとも噂された)。後白河院は遊女から直接今様を習い、梁塵秘抄を著した。

翁芸の成立

天皇家の法要という枠組みから独立して、自分たちだけで祝言芸を演じようとした試みと考えられる。なぜ翁の表象を獲得したかは不明だが、後戸の神や日本古層の自然のエネルギーを形象化したものである。そもそも猿楽は後戸猿楽の流れから力強い鬼芸を得意とし、鬼芸が本芸であるという意識を持っていた(これは全国の猿楽座でそうだが、特に観阿弥系の大和猿楽でその意識は強い)。鬼の形象でもよかったのかもしれないが、見世物として長寿でめでたい老人の形象を選択したと思われる。〈翁〉はプラスの見た目をしているが、闇の側面も濃厚に残しているということ。

嫗が登場しない、翁による祝福パターンは、西洋のサンタクロースにも言える。一種の女性差別とも。台湾には翁と嫗のペアが登場する祝芸が存在する。

cf. 世阿弥作の能〈高砂〉は、神官が住吉明神である翁と嫗による祝言を受けるストーリー

検非違使/後戸奉行

令外官である検非違使の役割(単なる警察ではない)

- ・ 掃除(キヨメ)
- ・ 後戸奉行(芸能者の統括)
- ・ 獄舎奉行(罪人の統括)…処刑に立ち会う

後戸と監獄が同じ位相にあったことがうかがえる。共通するのは穢れが発生したり、穢れを払ったりする局面をもつこと。

天皇や院の穢れ払いという重要な局面を担当。穢れの前に直接立つという権限。

天皇家と穢れの間立って国家安泰を担う。

※詳細は資料「検非違使の位相」を参照。検非違使のことだけでなく修正会や追儺そのものにも詳しく言及しているので一読をおすすめします。

…参考の参考までに、松岡教授の別授業(演劇論 I)の過去問題…

問1 能「清経」のクセについて、原典の「平家物語」などとの関係に留意しながら、解説せよ。

問2 世阿弥という作者、あるいは修羅能という分類枠などにも触れながら、能「清経」の特色について記述せよ。

問3 能とは、どのような演劇、または非演劇なのか、各自の思うところを述べよ。